

中学校給食の検討に関する予備調査

(概 要 版)

平成 18 年 5 月

武蔵野市教育委員会

— 目 次 —

I	調査の趣旨	3
II	調査結果の概要	3
	1. 中学生の食生活の実態について	3
	2. 中学校給食の完全実施について	3
III	調査結果	4
	1. 中学生の食生活の実態	4
	(1) 食物の好き嫌い	4
	(2) 栄養バランスに関する意識	5
	(3) 食事の片付け、作法の指導について	8
	(4) 朝食の状況	9
	(5) 昼食の状況	10
	(6) 夕食の状況	13
	2. 中学校給食の完全実施について	15
	(1) 中学校給食の完全実施について	15
	(2) 弁当の利点	16
	(3) 給食の利点	17

I 調査の趣旨

食生活の乱れ、生活習慣病の増加など国民の食をめぐる課題に対応するため、国は平成17年に食育基本法を制定した。一方、本市においても中学生の給食に関する議論が高まっている。

このような状況を背景として、平成18年度には中学校給食検討委員会を設置し、中学校給食の完全実施について検討を予定している。それに先立ち、中学校給食庁内検討委員会を設置し、今後の検討に資するための予備調査を実施した。

調査は、市内6校の中学校に対して各学年より1クラスを抽出し、生徒、保護者及び教員を対象として平成18年3月13日から17日にかけて実施された。調査対象者数は、生徒707名、保護者707名、教員131名で、回答はそれぞれ613名(86.7%)、418名(59.1%)、100名(76.3%)であった。なお調査結果の分析にあたっては、昭和63年3月に実施した「中学生の食生活に関するアンケート」との比較も行った。

II 調査結果の概要

1. 中学生の食生活の実態について

食をめぐる議論の中で、朝食欠食や孤食など、子どもたちの食習慣や食環境の乱れが指摘されているが、今回の調査で本市の中学生に関しては、「朝食を食べない」または「ほとんど食べない」と回答した者は6.3%にとどまった。これは、昭和63年の調査結果(7.3%)と比べてあまり変化がない数字である。

また、生徒の89.7%は、「家族全員」または「家族の一部」と夕食をとっていると回答しており、こちらも昭和63年の調査と同様な結果が見られた。

さらに、保護者が子どもの食事作りで一番配慮するとしてあげている内容は、「栄養バランス」が79.7%だった。

以上のことから、本市の中学生をとりまく食習慣や食環境については、一般に言われているほど大きな変化はみられず、家庭においても子どもたちの食に対する必要な配慮が払われていることが伺える。

なお、弁当の持参状況については、「ときどき持ってこない」が15.0%あり、その理由として「親の都合で作れない」という回答が56.9%だった。

2. 中学校給食の完全実施について

中学校給食のあり方について一番多い回答は、「完全給食の実施を望む」で、生徒41.3%、保護者63.2%、教職員35.0%である。これに弁当と完全給食の選択制が良いという回答を加えると生徒49.0%、保護者80.2%、教職員43.0%が完全給食の導入を望んでいることになる。

昭和63年の調査結果では、保護者52.2%、教職員12.2%が「学校給食が必要」と回答しており、今回、完全給食の実施を求める意見が増加している。

一方、現状の「弁当と牛乳給食だけでいい」という回答も生徒20.1%、保護者6.5%、教職員12.2%に見られた。

弁当の利点については、生徒、保護者では「内容や量を自由に選択できる」、「保護者の責任や子どもとの結びつき」などの項目が上位を占めるが、生徒や教職員からは、「給食の準備、片付けの大変さ」、「教育課程への影響」など、給食に対する課題を浮かび上がらせる回答も上位にあがっている。

給食の利点については、生徒70.6%、教職員60.0%が「保護者の負担軽減」をトップにあげており、保護者も66.3%が「負担軽減」と回答している。

Ⅲ 調査結果

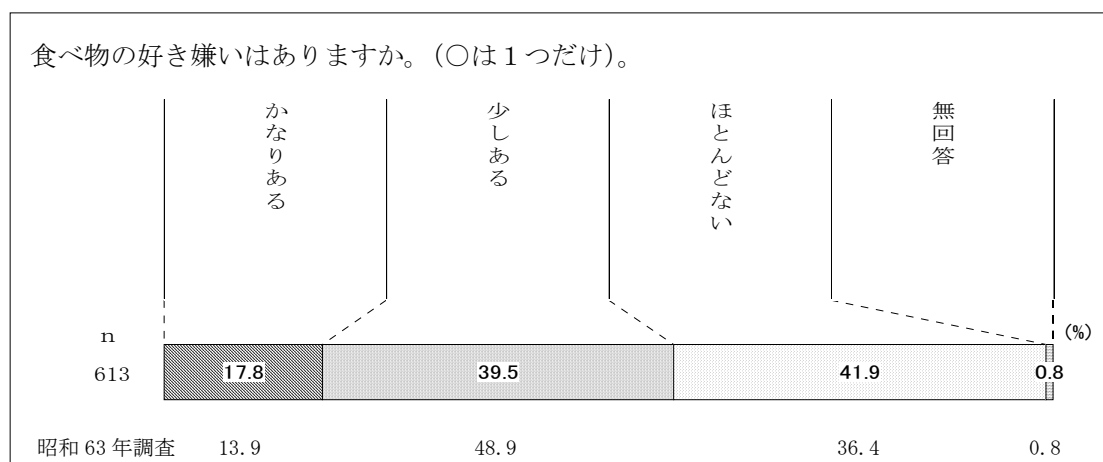
1. 中学生の食生活の実態

(1) 食物の好き嫌い

今回の調査結果によると、6割の生徒に何らかの好き嫌いがある。好きなものは、ご飯類、パン類、麺類、肉類など、嫌いなものは豆類、野菜類、魚類などのポイントが高い。昭和63年の調査とは設問が異なるため、単純比較はできないが、好きな食物、嫌いな食物とも同様な品目が上位を占めている。

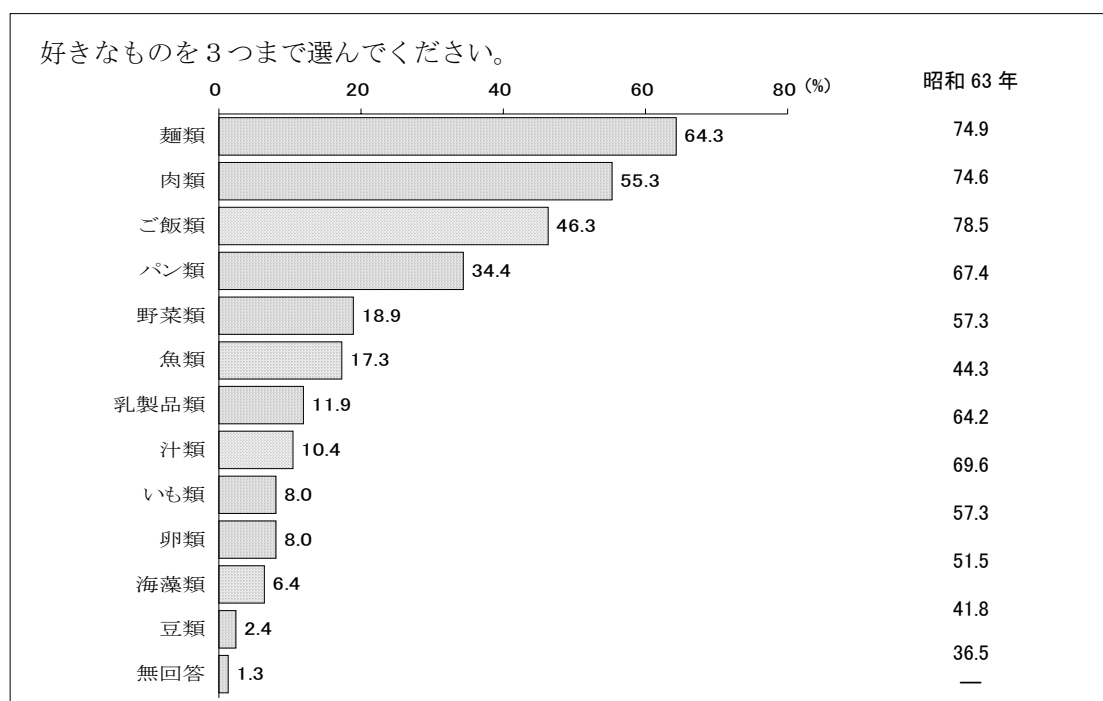
保護者の好き嫌いへの対応に関する調査によると「食事の好き嫌いや食べ残しを認めている」13.6%、「事情により認める」が62.7%と合わせて7割以上が認めており、昭和63年の調査結果に比較すると食べ残しを認める回答が4.7ポイント増加し、保護者が寛大になっている傾向が伺える。

(1)-1 食べ物の好き嫌い(生徒)



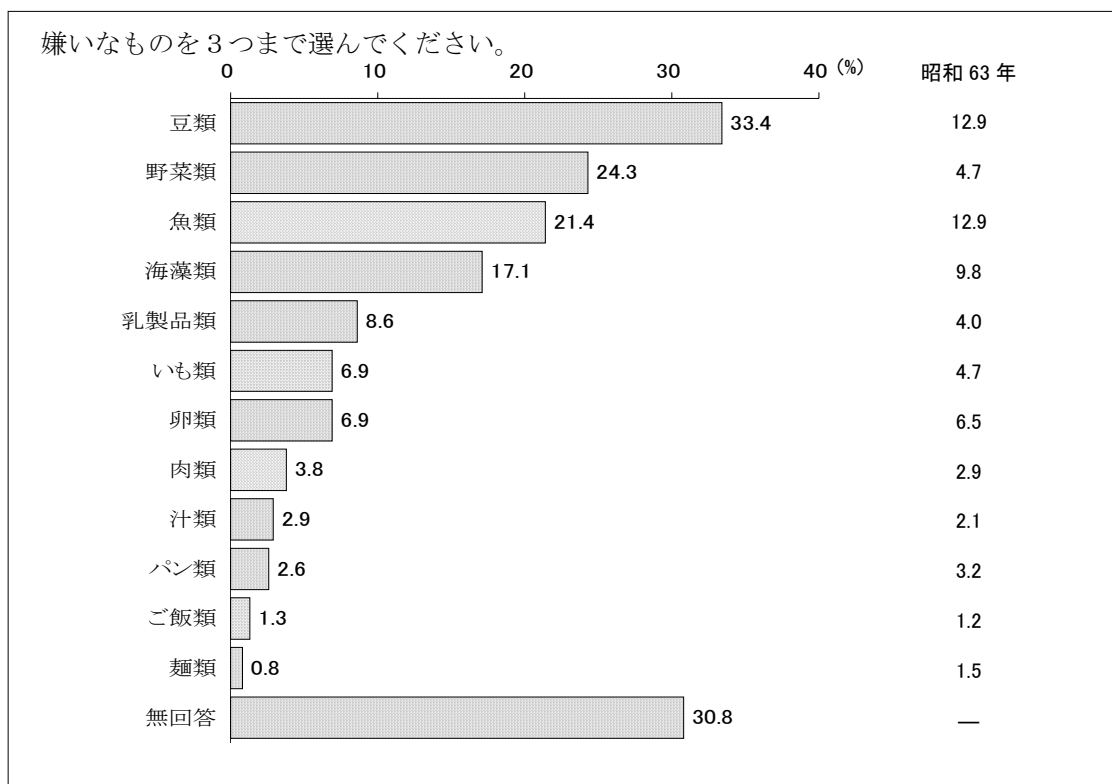
食べ物の好き嫌いは、「かなりある」(17.8%)と「少しある」(39.5%)を合わせた『ある』が57.3%であり、「ほとんどない」(41.9%)は4割強である。

(1)-2 好きなもの(生徒)



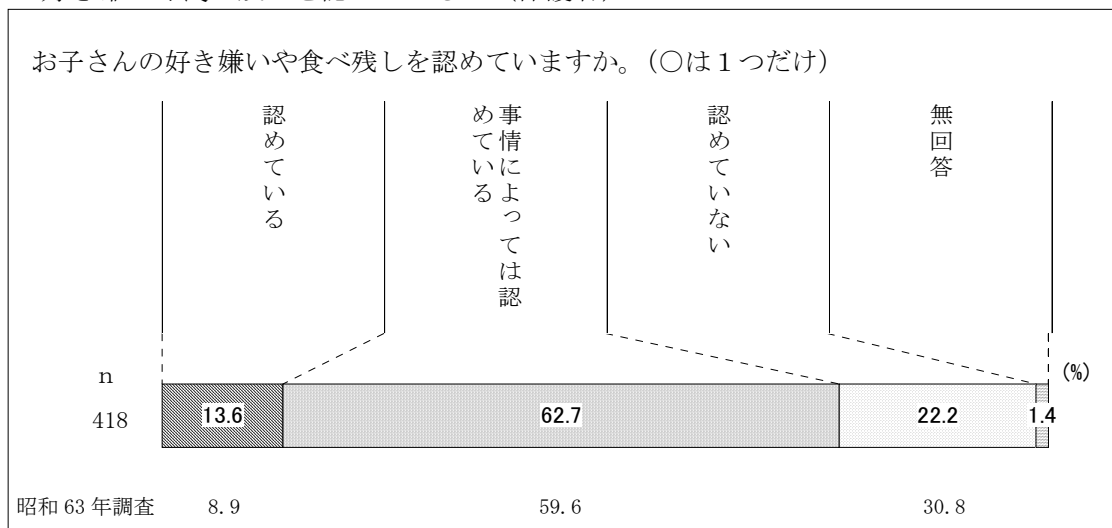
好きな食べ物を3つまで選んでもらったところ、麺類(64.3%)が6割を超え、肉類(55.3%)、ご飯類(46.3%)がこれに続いている。(昭和63年は3つまでに限定していないため、単純比較は出来ない。)

(1)-3 嫌いなもの(生徒)



嫌いなものを3つまで選んでもらったところ、豆類 (33.4%)、野菜類 (24.3%)、魚類 (21.4%) が多く選ばれている。なお30.8%の人は嫌いなものを答えていない。(昭和63年は3つまでに限定していない。)

(1)-4 好き嫌いや食べ残しを認めているか (保護者)

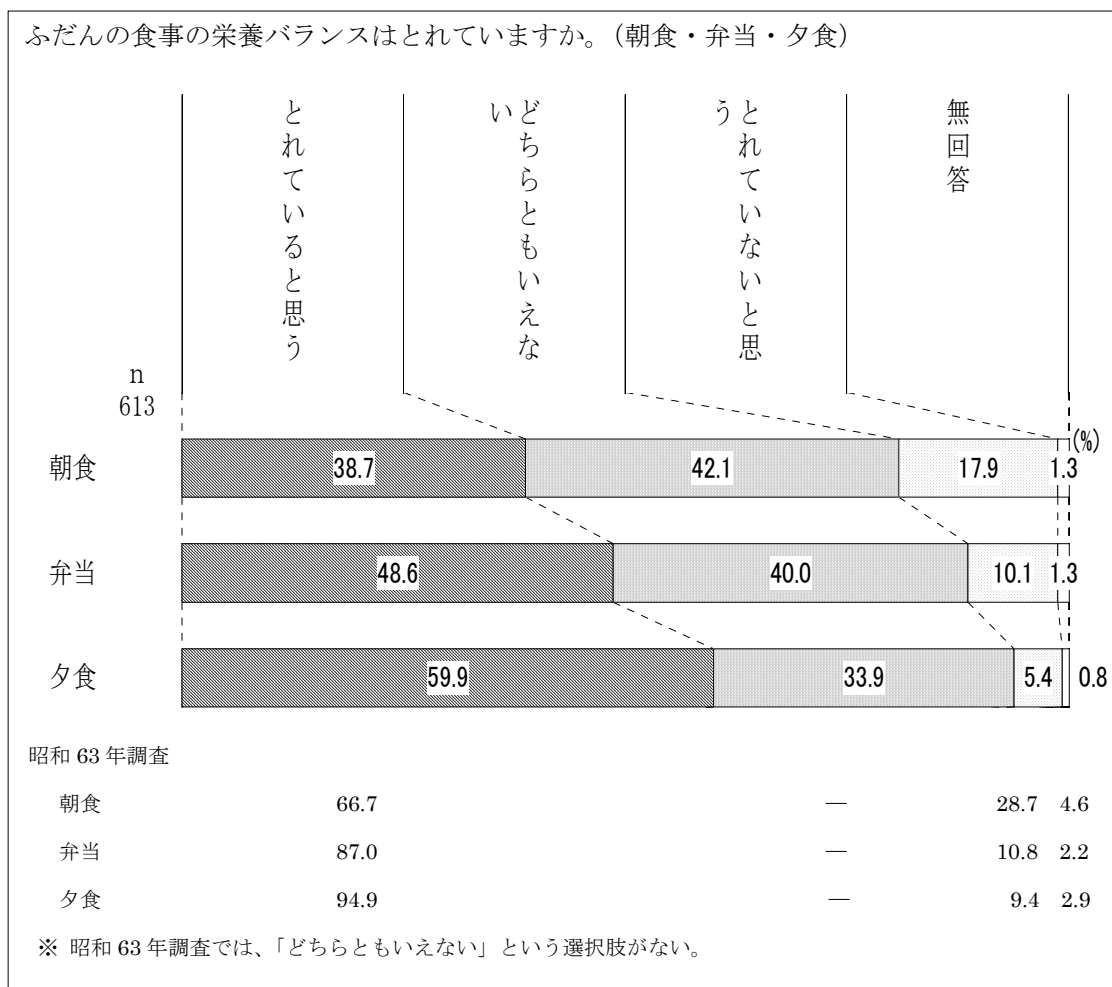


子どもの好き嫌いや食べ残しを「認めていない」のは22.2%、「認めている」(13.6%)と「事情によっては認めている」(62.7%)を合わせた『認めている』は76.3%となっている。

(2) 栄養バランスに関する意識

生徒に対して、毎日の食事の栄養バランスがとれているかどうかについて調査したところ、栄養バランスがとれていると感じている割合は、朝食 38.7%、弁当 48.6%、夕食 59.9%である。あくまで主観的に感じているという調査にとどまり客観的資料とはいえないが、生徒は、朝食や昼食に比べて夕食が、一番栄養バランスがとれていると感じていることがわかる。

(2)-1 栄養バランスはとれているか（生徒）



ふだんの朝食の栄養バランスが「とれていると思う」生徒は 38.7%で、「とれていないと思う」（17.9%）を約 20 ポイント上回る。しかし、「どちらともいえない」（42.1%）は 4 割以上を占め、最も多数となっている。

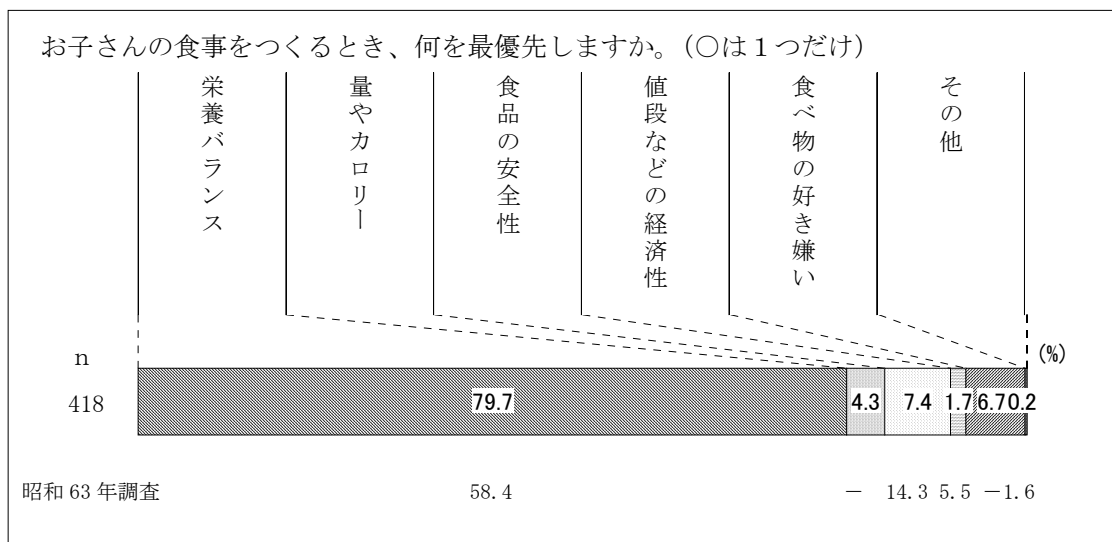
弁当の栄養バランスが「とれていると思う」生徒は 48.6%と半数近く、「とれていないと思う」（10.1%）を大きく上回る。

ふだんの夕食の栄養バランスが「とれていると思う」割合は 59.9%とほぼ 6 割、「とれていないと思う」は 5.4%と少数である

保護者が食事作りに際して一番配慮している内容は、「栄養バランスに配慮した食事」であり、79.7%と他の理由を圧倒している。

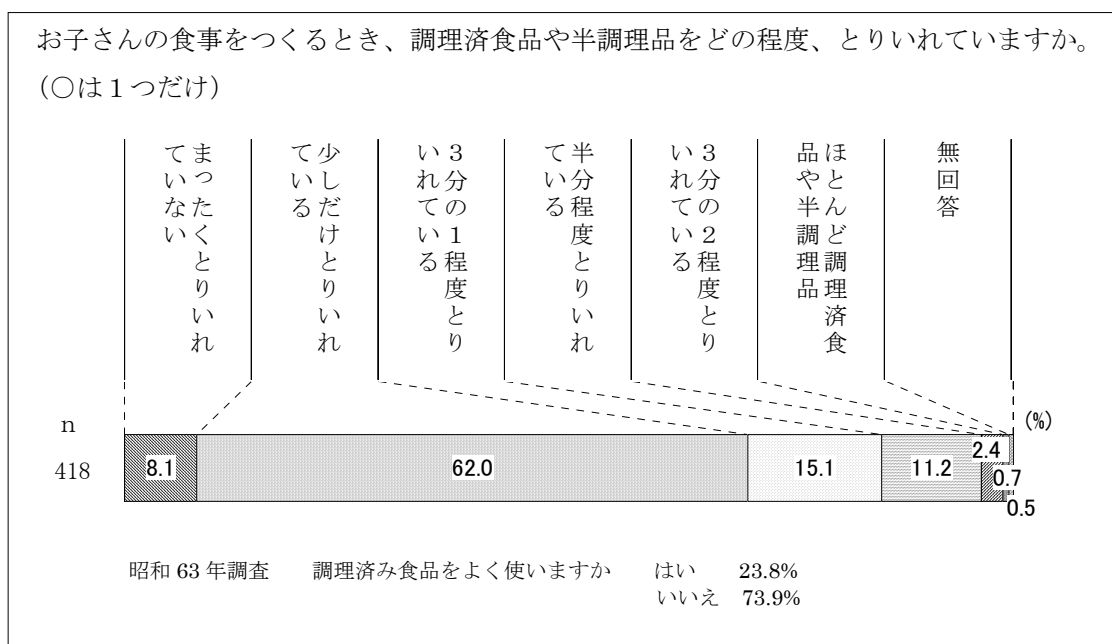
また、調理に際して調理済み食品の利用頻度を調査したところ「食事の 3 分の 1 以上にとり入れている」が 3 割である。実際にとり入れている食品は、「冷凍食品」78.3%、「できあいの惣菜」33.8%、「レトルト食品・インスタント食品」25.9%で、昭和 63 年の調査とは設問が異なるため単純比較はできないが、冷凍食品やレトルト食品の使用に変化が無いのに対して、出来合いの惣菜類の使用が増えていることが伺える。

(2)-2 食事をつくるときの最優先事項（保護者）



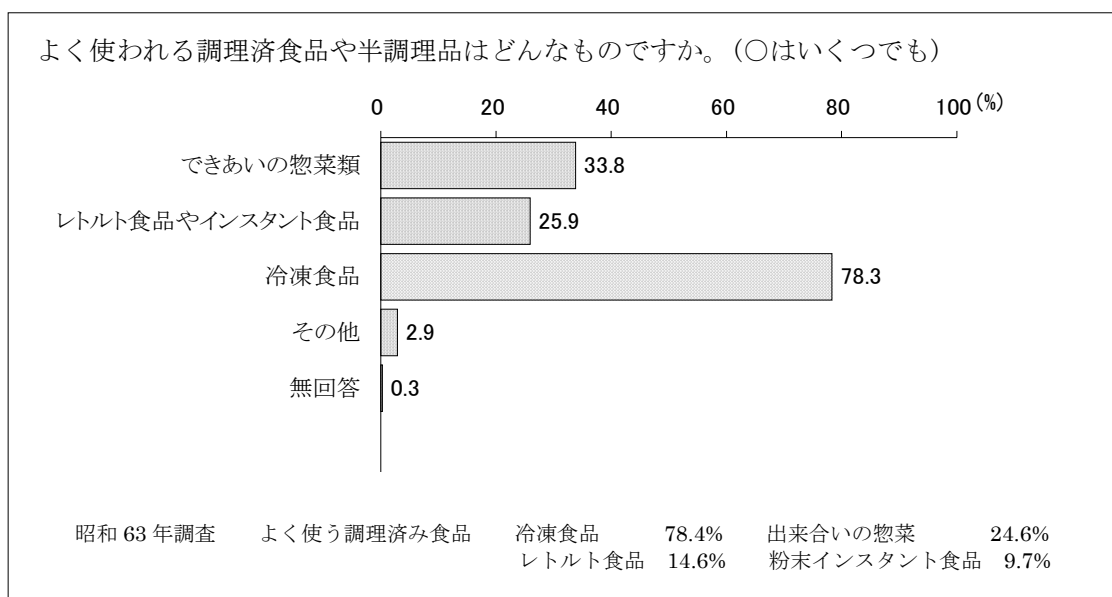
子どもの食事をつくるときに、「栄養バランス」(79.7%)を最優先させる人が8割近く、「食品の安全性」(7.4%)や「食べ物の好き嫌い」(6.7%)は1割未満である。

(2)-3 調理済食品や半調理品の利用度（保護者）



子どもの食事をつくるときに、調理済食品や半調理品を「少しだけとりいれている」人が62.0%を占め、「3分の1程度取りいれている」(15.1%)、「半分程度とりいれている」(11.2%)がこれに続いている。「まったくとりいれていない」人は8.1%と、1割弱である。

(2)-4 よく使う調理済食品や半調理品（保護者）

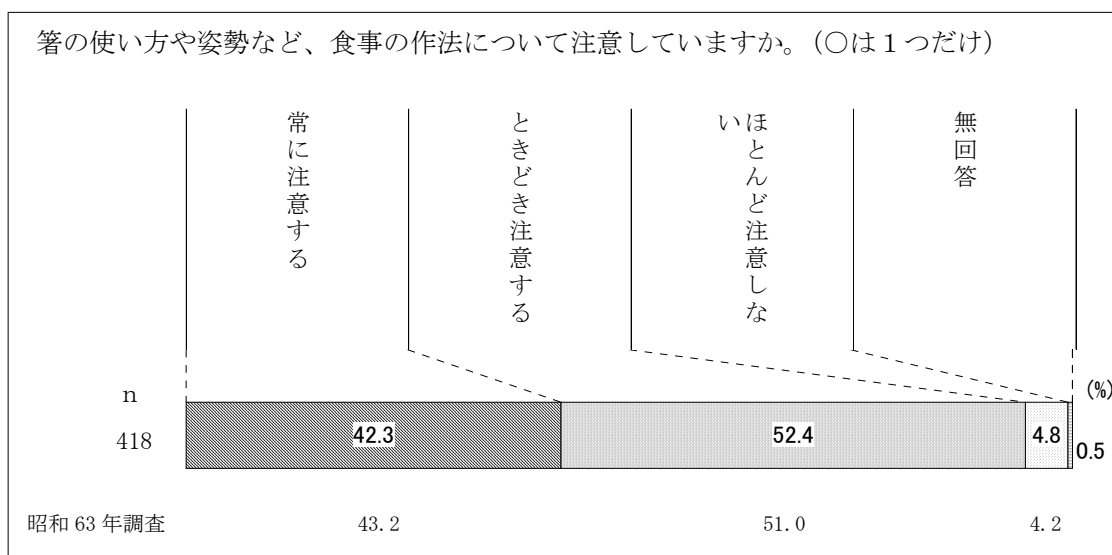


調理済食品や半調理品を利用することがある人を対象に、具体的な内容を聞いたところ、「冷凍食品」（78.3%）を利用する人が8割近くと圧倒的多数を占め、「できあいの惣菜類」（33.8%）や「レトルト食品やインスタント食品」（25.9%）は3割前後となっている。

(3) 食事の片付け、作法の指導について

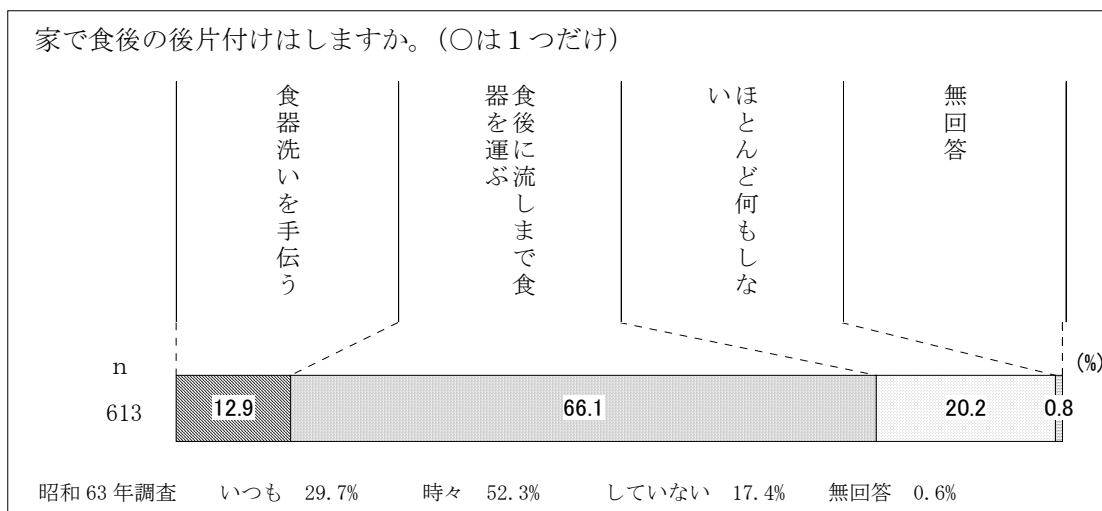
食べることと同様に重要なこととして、食事に関する作法や家事の手伝いがある。食事後の手伝いは、「食器洗いを手伝う」が12.9%、「流しまで運ぶ」が66.1%である。また、食事の作法について「常に注意する」保護者が42.3%、「ときどき注意する」が52.4%であり、食事の片付け、作法の指導ともに昭和63年の調査結果とあまり大差がなかった。

(3)-1 食事の作法について注意するか(保護者)



食事の作法については、「常に注意する」（42.3%）と「ときどき注意する」（52.4%）を合わせた『注意する』が94.7%を占め、「ほとんど注意しない」は4.8%である。

(3)-2 食後の後片付け（生徒）



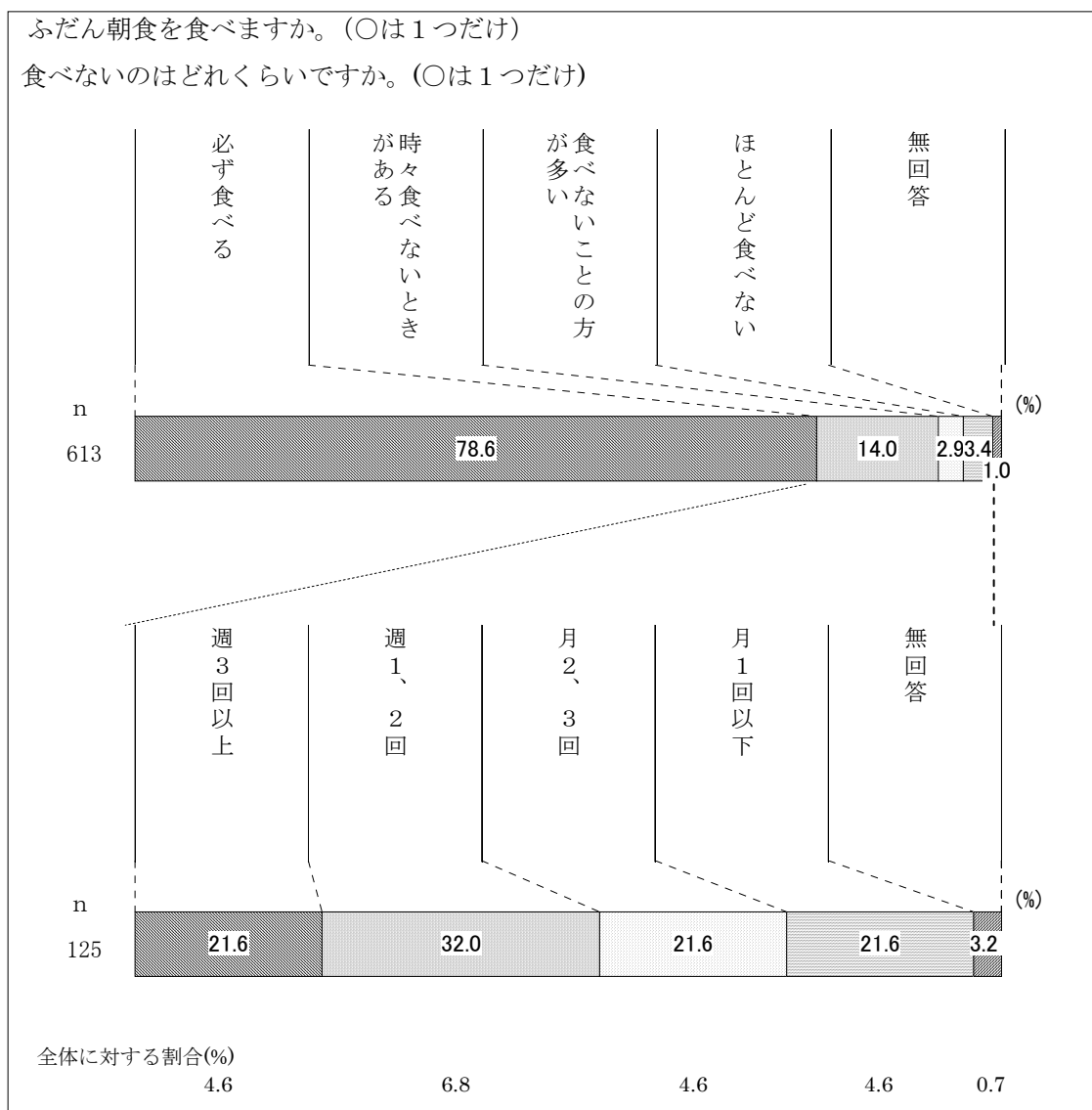
後片付けの手伝いとして、「食後に流しまで食器を運ぶ」人の 66.1%に対して、「食器洗いを手伝う」のは 12.9%となっている。また、約2割は「ほとんど何もしない」（20.2%）と回答している。

(4) 朝食の状況

食育基本法に関する内閣府の資料の中で、独立行政法人日本スポーツ振興センターによる「平成12年度児童生徒の食生活等実態調査」の結果として、1週間のうち1回以上朝食を食べない小中学生が約20%いることを指摘し、朝食欠食を問題としているが、今回の調査で本市の中学生に関しては、週1回以上朝食をとらない生徒は約1割であり、全国調査より低い数字であった。

また、朝食を「ほとんど食べない」または「食べないことのほうが多い」と回答した生徒は6.3%にとどまった。これは、昭和63年の調査結果の「ほとんど食べない」生徒7.3%と比べてもあまり変化がない数字である。

(4)-1 朝食を食べているか（生徒）



朝食を「必ず食べる」人は 78.6%と多数を占め、「時々食べないときがある」は 14.0%、「食べないことが多い」(2.9%)と「ほとんど食べない」(3.1%)は 3%前後である。

また、朝食を食べないことがある人を対象に、食べない頻度を聞いたところ、3人にひとりが「週1、2回」(32.0%)と回答し、「週3回以上」、「月2、3回」、「月1回以下」はいずれも 21.6%である。

(5) 昼食の状況

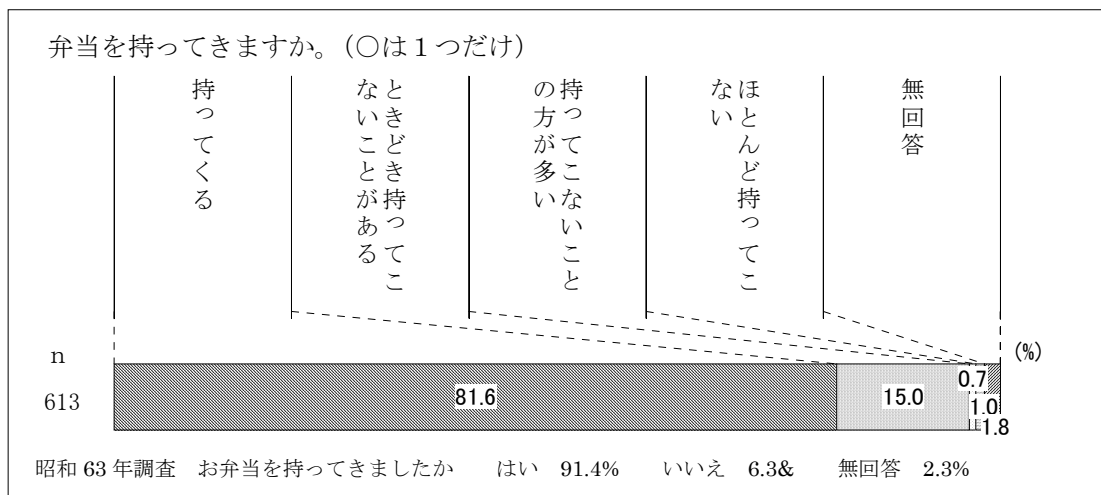
弁当の持参状況については、「時々持ってこない」生徒が 15.0%あり、その理由として「親の都合」56.9%、「忘れた」26.5%、「パンや店の弁当を食べたい」23.5%という回答であった。

保護者が市販弁当やあっせん弁当を利用するときの理由としては「弁当を作る時間がない」62.2%、「食材の用意が出来ない」31.1%といった回答が上位にあげられている。また、弁当を作ることに對して「時々負担になる」、「かなり負担になる」という回答を合わせると 8割を超えることから、多くの保護者が弁当作りに負担を感じていることがわかる。

負担感を感じる理由としては、6割を超える保護者が「朝の忙しい時間帯に調理時間がかかる」「メニューを考えること」をあげている。

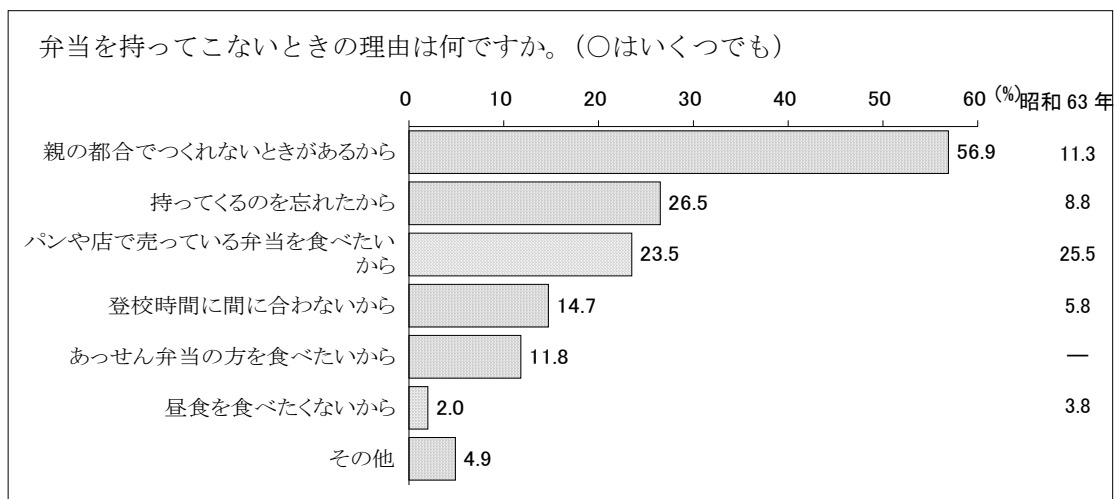
弁当を作るときに気を使う点については、「栄養バランス」が 55.7%だったが、次に「季節による衛生面」14.1%という回答が多かったことは、弁当ならではの苦勞とみることができる。

(5)-1 弁当の持参（生徒）



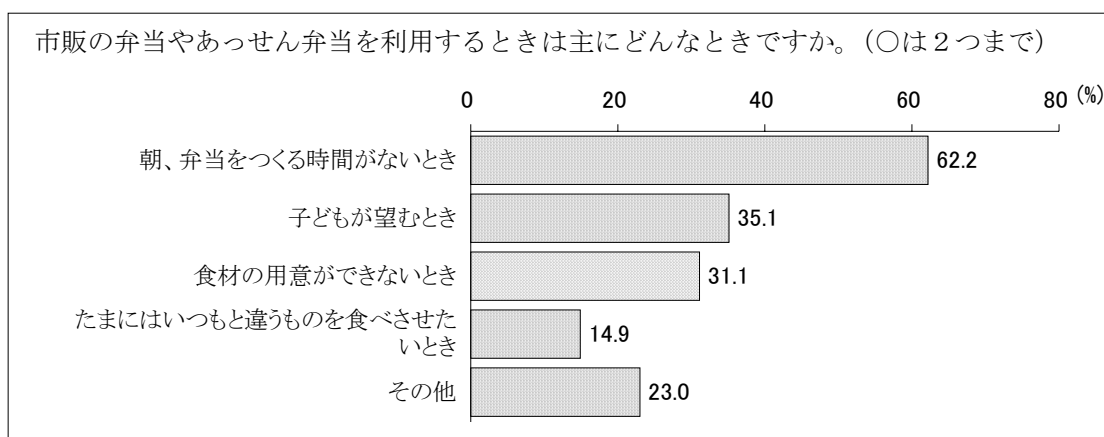
弁当を「持ってくる」割合は 81.6%と大部分を占め、「ときどき持っていないことがある」は 15.0%である。

(5)-2 弁当を持参しない理由（生徒）



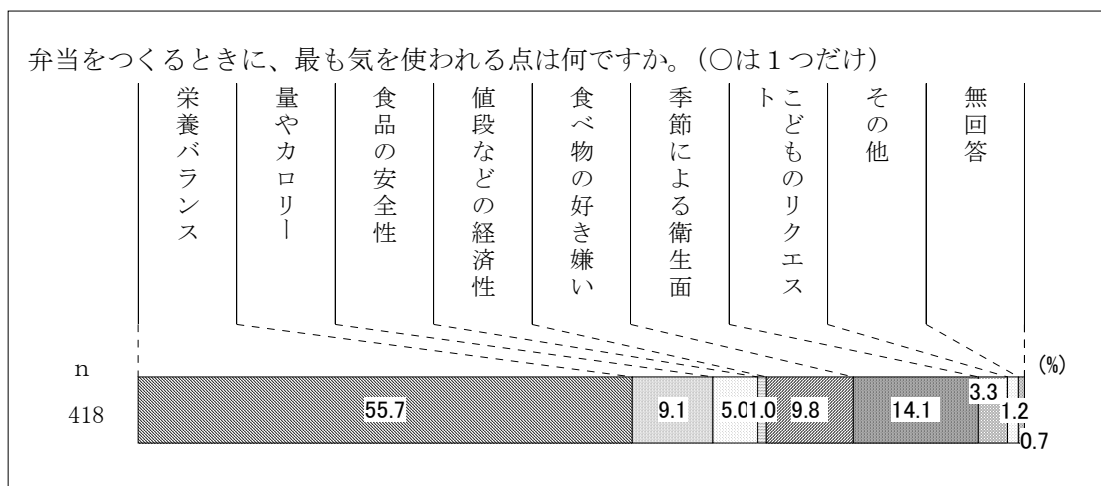
弁当を持っていないことがある人を対象に、その理由を複数回答形式で聞いたところ、「親の都合でつくりえないときがあるから」(56.9%)が過半数からあげられている。以下、「持ってくるのを忘れたから」(26.5%)、「パンや店で売っている弁当を食べたいから」(23.5%)と続いている。

(5)-3 市販の弁当やあっせん弁当を利用するとき（保護者）



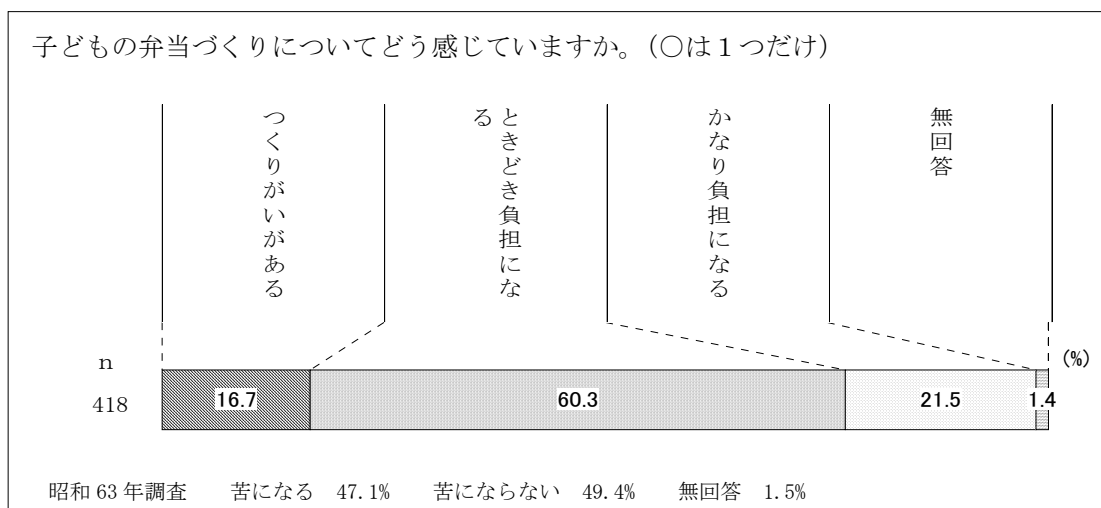
市販の弁当やあっせん弁当を利用する人に、どのようなときに利用するかを聞いたところ、「朝、弁当をつくる時間がないとき」(62.2%)が6割を占め、以下「子どもが望むとき」(35.1%)、「食材の用意ができないとき」(31.1%)が主な理由である。

(5)-4 弁当をつくるときに最も気を使う点（保護者）



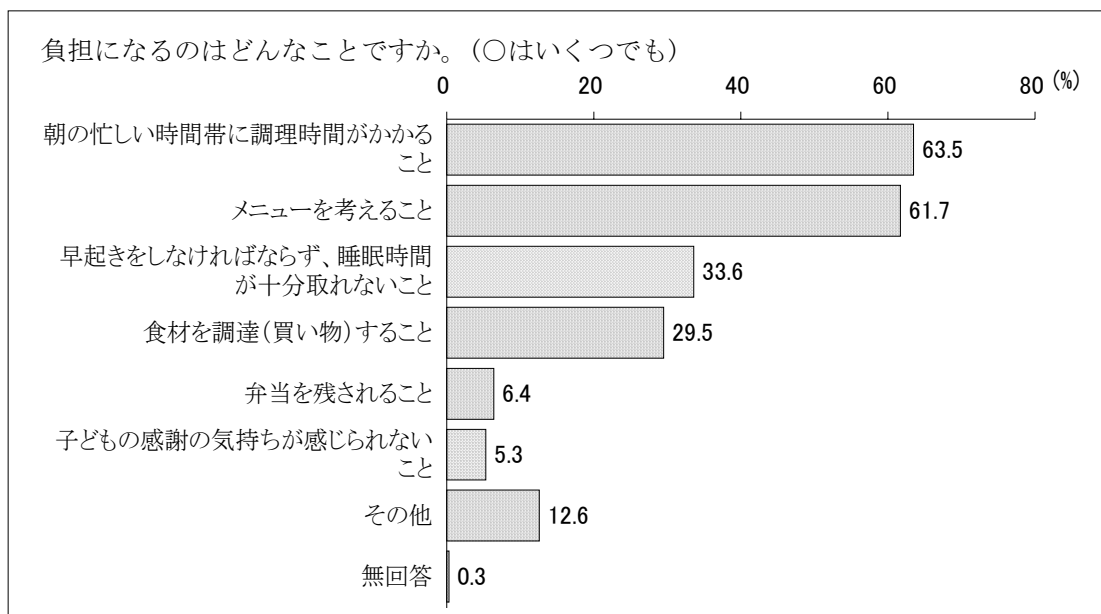
弁当をつくるときに最も気を使う点として、「栄養バランス」（55.7%）が過半数となっている。食事一般の場合（問2）と比べて、「季節による衛生面」（14.1%）や「量やカロリー」（9.1%）が重視されている点に特徴がある。

(5)-5 子どもの弁当づくりについて（保護者）



子どもの弁当づくりに関して、「つくりがいがあある」と回答したのは 16.7%で、「ときどき負担になる」（60.3%）と「かなり負担になる」（21.5%）を合わせた『負担になる』は 81.8%に達している。

(5)-6 負担になること（保護者）

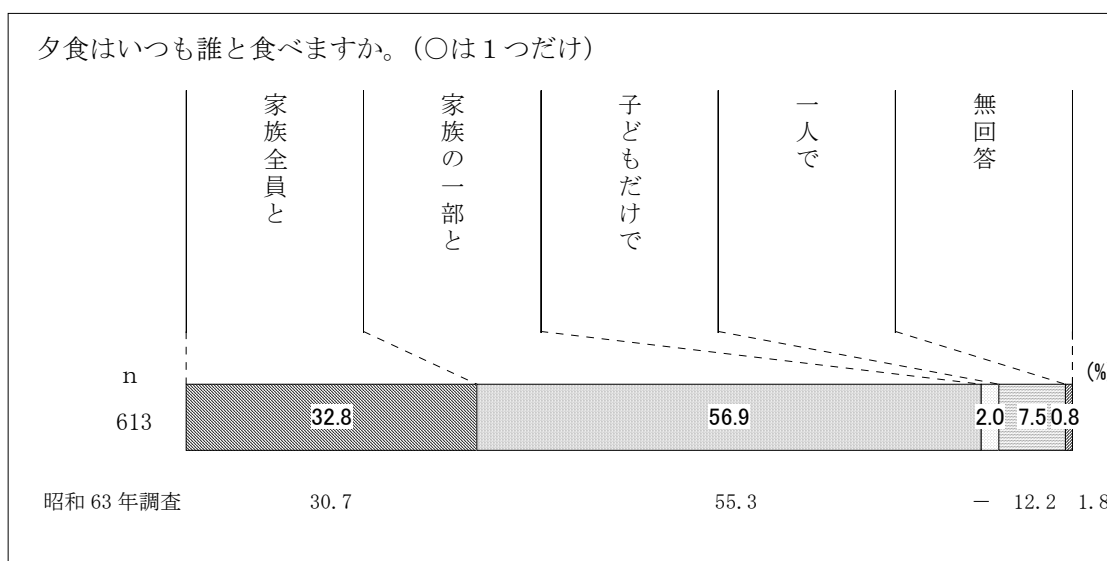


弁当づくりが『負担になる』と回答した人を対象に、どのようなことが負担かを聞いたところ、「朝の忙しい時間帯に調理時間がかかること」(63.5%)と「メニューを考えること」(61.7%)の2点が6割以上からあげられている。

(6) 夕食の状況

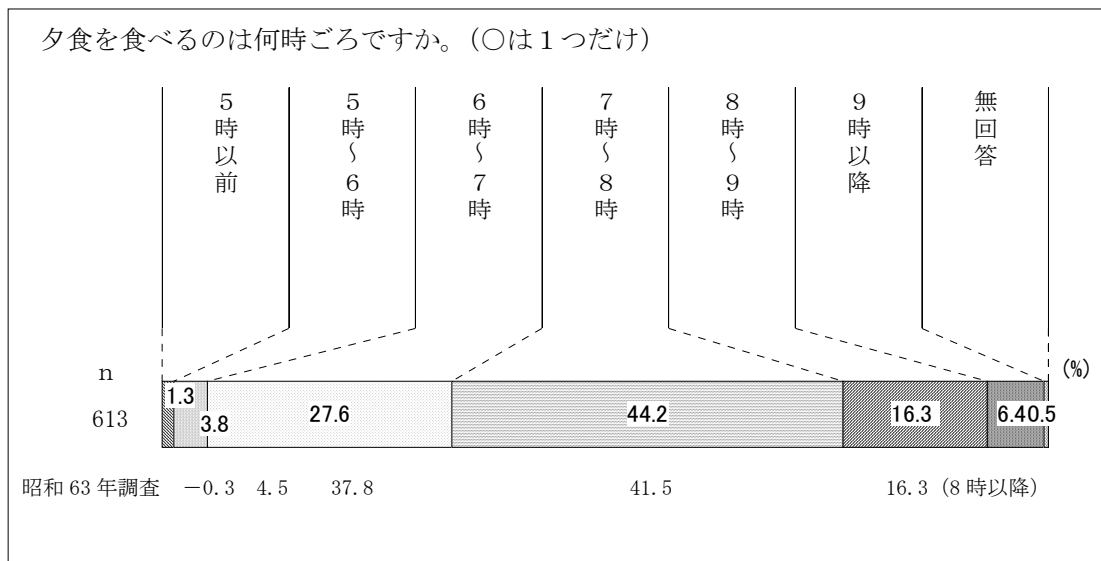
生徒が一人だけで食事をする孤食が問題とされているが、今回の調査では 89.7%の生徒が「家族全員」または「家族の一部」と一緒に夕食をとっていると回答しており、昭和 63 年の調査と同様な結果が見られた。また、食事時間帯は午後 7 時から 8 時が 44.2%を占め、食事時間も 30 分から 1 時間かける生徒が 42.6%おり、今回の調査結果からは、武蔵野市の中学生の夕食は比較的健全とみることができる。

(6)-1 誰と夕食を食べるか(生徒)



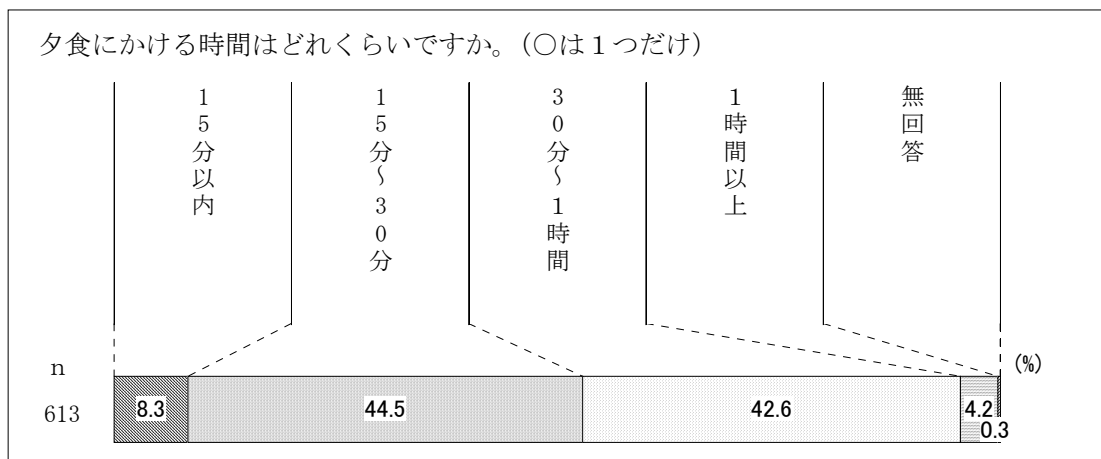
「家族全員と」夕食を食べるのは 32.8%であり、過半数が「家族の一部と」(56.9%) 食べている。

(6)-2 夕食を食べる時刻（生徒）



夕食を食べる時間帯は、「7～8時」（44.2%）が最も高く、次いで「6～7時」（27.6%）となっており、7割以上の方が6時から8時の間に食べていることになる。

(6)-3 夕食にかける時間（生徒）



夕食にかける時間は、「15～30分」（44.5%）と「30分～1時間」（42.6%）がほぼ等しく、「1時間以上」（4.2%）や「15分以内」（8.3%）は1割未満である。

2. 中学校給食の完全実施

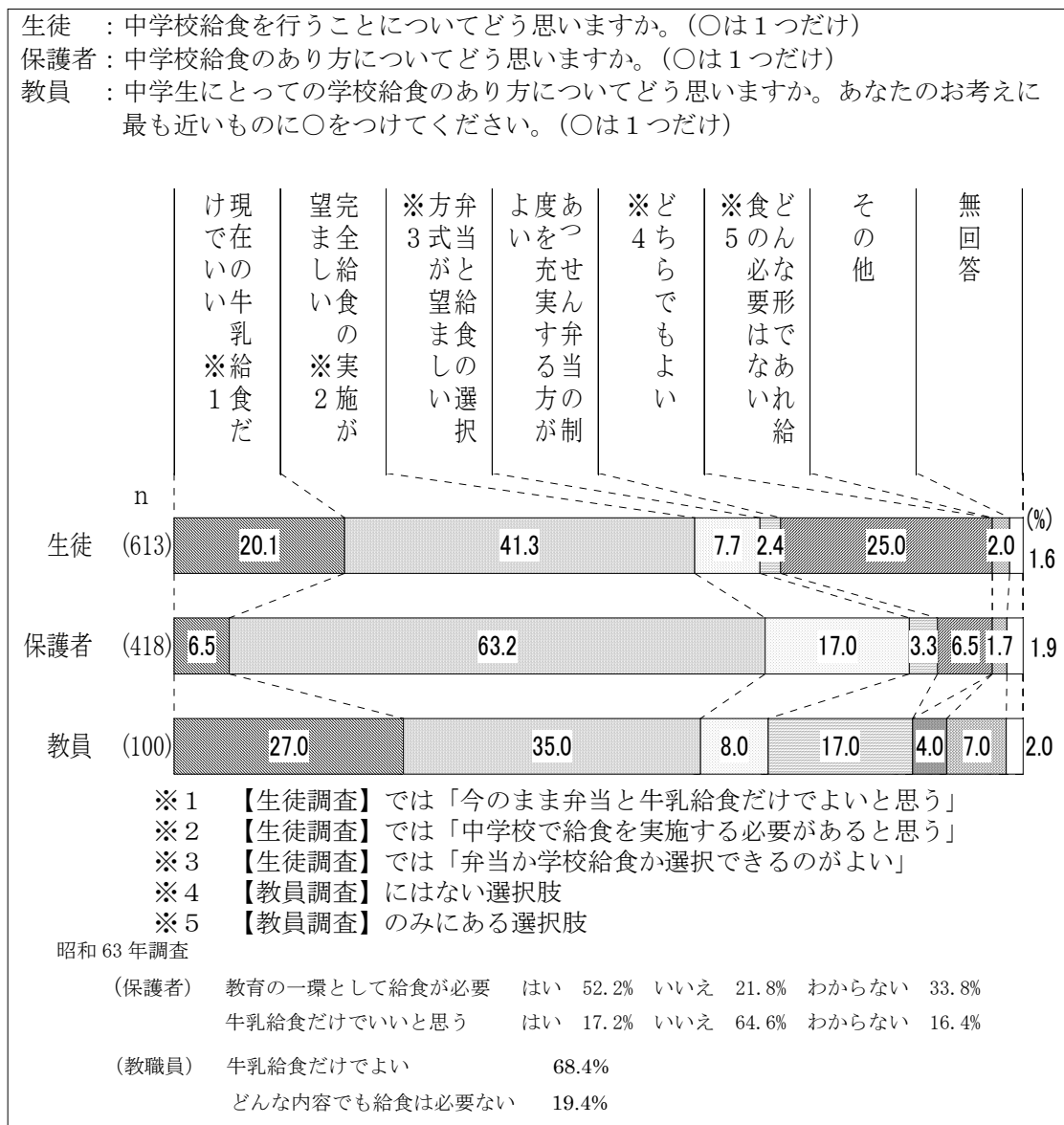
(1) 中学校給食の完全実施について

中学校給食のあり方について一番多い回答は、「完全給食の実施を望む」で、生徒 41.3%、保護者 63.2%、教職員 35.0%である。これに弁当と完全給食の選択制が良いという回答を加えると生徒 49.0%、保護者 80.2%、教職員 43.0%が完全給食の導入を望んでいることになる。

昭和 63 年の調査結果では、保護者 52.2%、教職員 12.2%が「学校給食が必要」と回答しており、今回、完全給食の実施を求める意見が増加している。

一方、現状の「弁当と牛乳給食だけでいい」という回答も生徒 20.1%、保護者 6.5%、教職員 12.2%に見られた。

(1)-1 中学校給食の実施について（生徒・保護者・教職員）

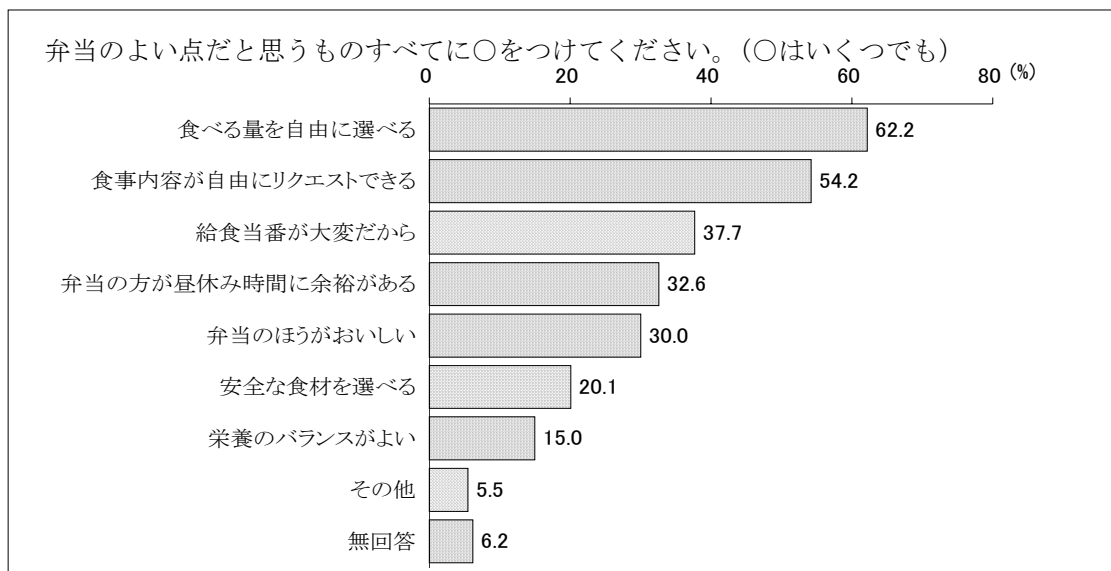


生徒は、中学校給食に関して「中学校で給食を実施する必要があると思う」(41.3%)という意見が最多であり、「どちらでもよい」(25.0%)、「今のまま弁当と牛乳給食だけでよいと思う」(20.1%)が2割台となっている。保護者は、中学校給食のあり方については、「完全給食の実施が望ましい」(63.2%)が他を引き離し、「弁当と給食の選択方式が望ましい」は 17.0%、他の意見はいずれも 1 割未満である。教職員は、学校給食のあり方については、「完全給食の実施が望ましい」(35.0%)が最も高く、「現在の牛乳給食だけでいい」(27.0%)、「あっせん弁当の制度を充実する方がよい」(17.0%)がこれに続いている。

(2) 弁当の利点

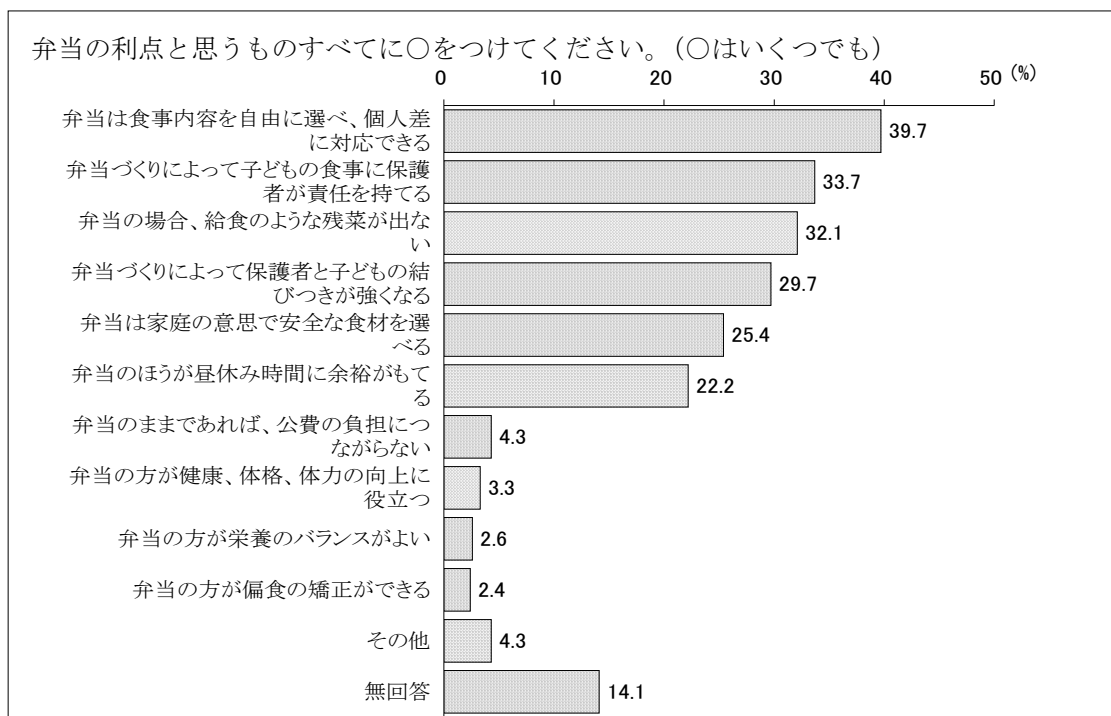
弁当の利点については、生徒、保護者では「内容や量を自由に選択できる」、「保護者の責任や子どもとの結びつき」などの項目が上位を占めるが、生徒や教職員からは、「給食の準備、片付けの大変さ」、「教育課程への影響」など、給食に対する課題を浮かび上がらせる回答も上位にあがっている。

(2)-1 弁当のよい点(生徒)



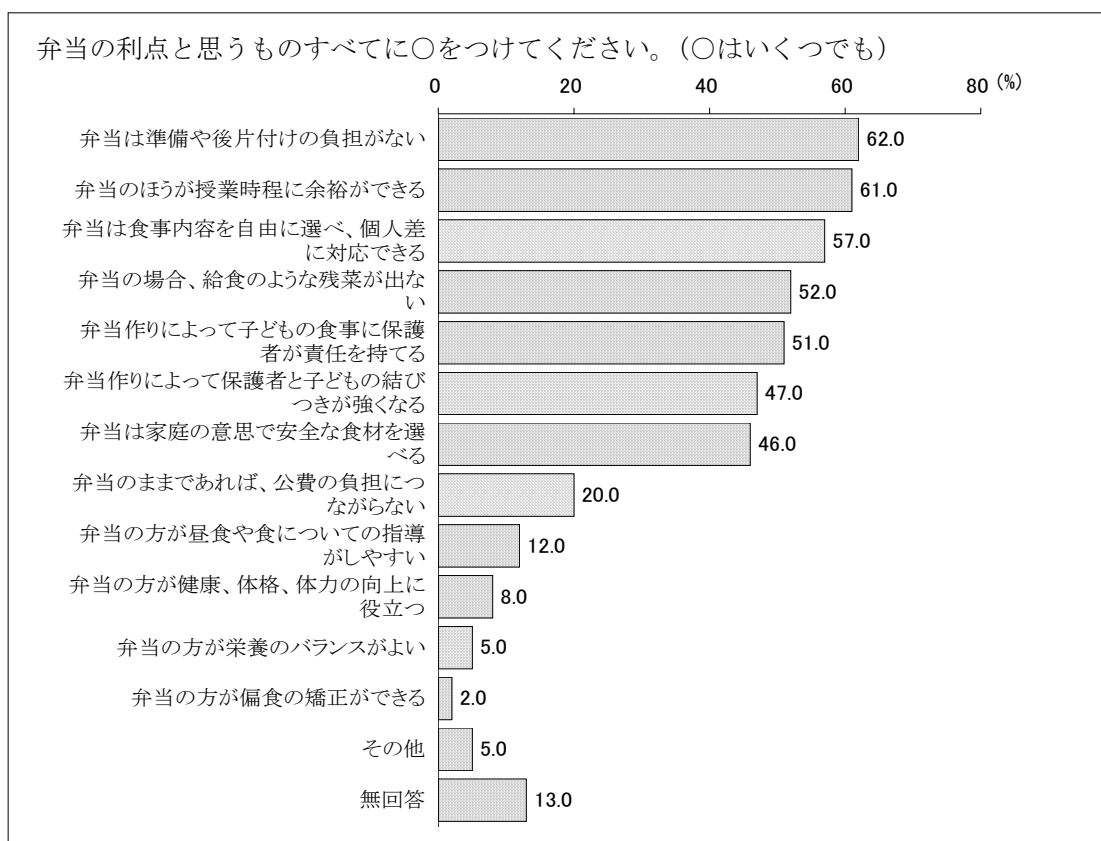
弁当のよい点を選んでもらったところ、「食べる量を自由に選べる」(62.2%)と「食事内容が自由にリクエストできる」(54.2%)の2点が過半数、「給食当番が大変だから」(37.7%)、「弁当の方が昼休み時間に余裕がある」(32.6%)、「弁当のほうがおいしい」(30.0%)が3割台で続いている。

(2)-2 弁当の利点(保護者)



弁当の利点は、「弁当は食事内容を自由に選べ、個人差に対応できる」が約4割で最多、以下、「弁当によって子どもの食事に保護者が責任を持てる」、「弁当の場合、残菜が出ない」が3割以上となっている。

(2)-3 弁当の利点(教職員)



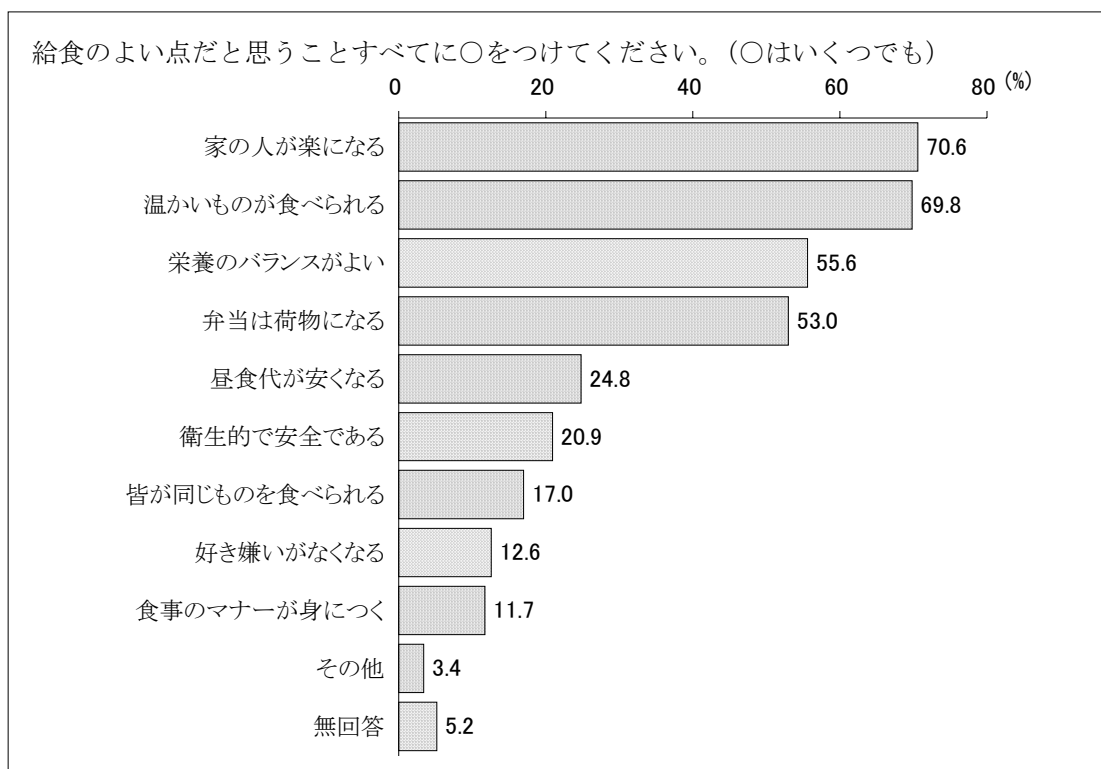
弁当の利点を選んでもらったところ、「弁当は準備や後片付けの負担がない」と「弁当のほうに授業時間に余裕ができる」の2点が6割以上から選ばれ、「弁当は食事内容を自由に選べ、個人差に対応できる」、「弁当の場合、給食のような残菜が出ない」、「弁当作りによって子どもの食事に保護者が責任を持てる」が5割代となっている。

(3) 給食の利点

給食の利点については、生徒 70.6%、教職員 60.0%が「保護者の負担軽減」をトップにあげており、保護者も 66.3%が「負担軽減」と回答している。このことは、弁当作りに関する保護者の負担感を、保護者のみならず生徒、教職員も感じていることをあらわしているといえる。

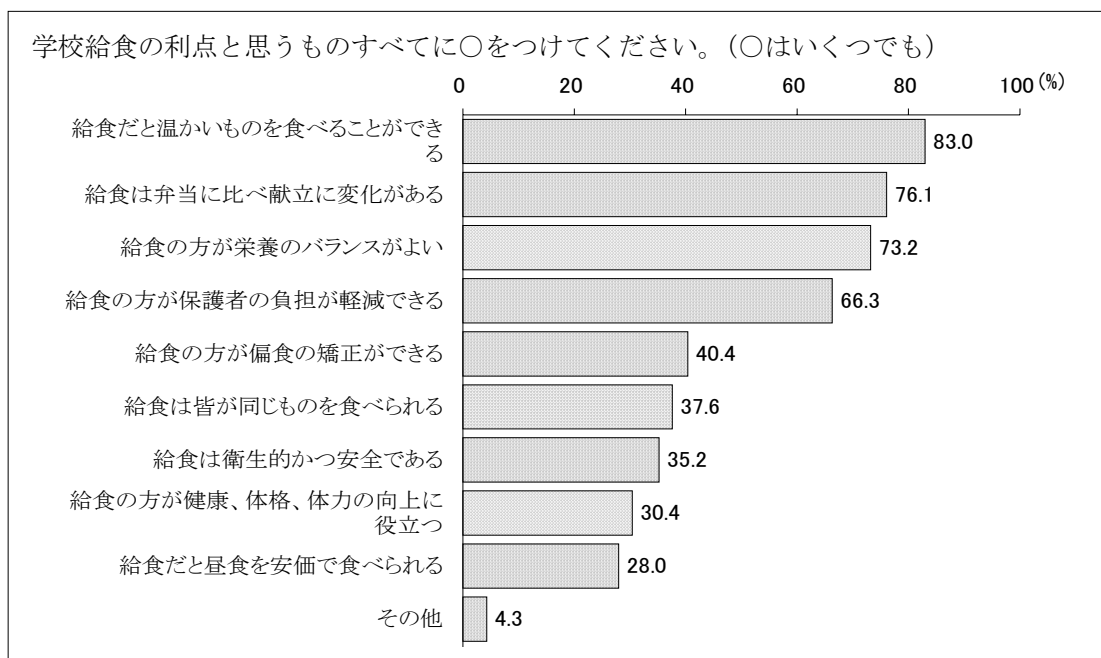
また、給食自体の利点としては、「あたたかい」、「栄養バランスがいい」といった回答のほか、教師では「保護者の都合で弁当を持ってこられない生徒への対応」60.0%という回答も上位にあった。

(3)-1 給食のよい点(生徒)



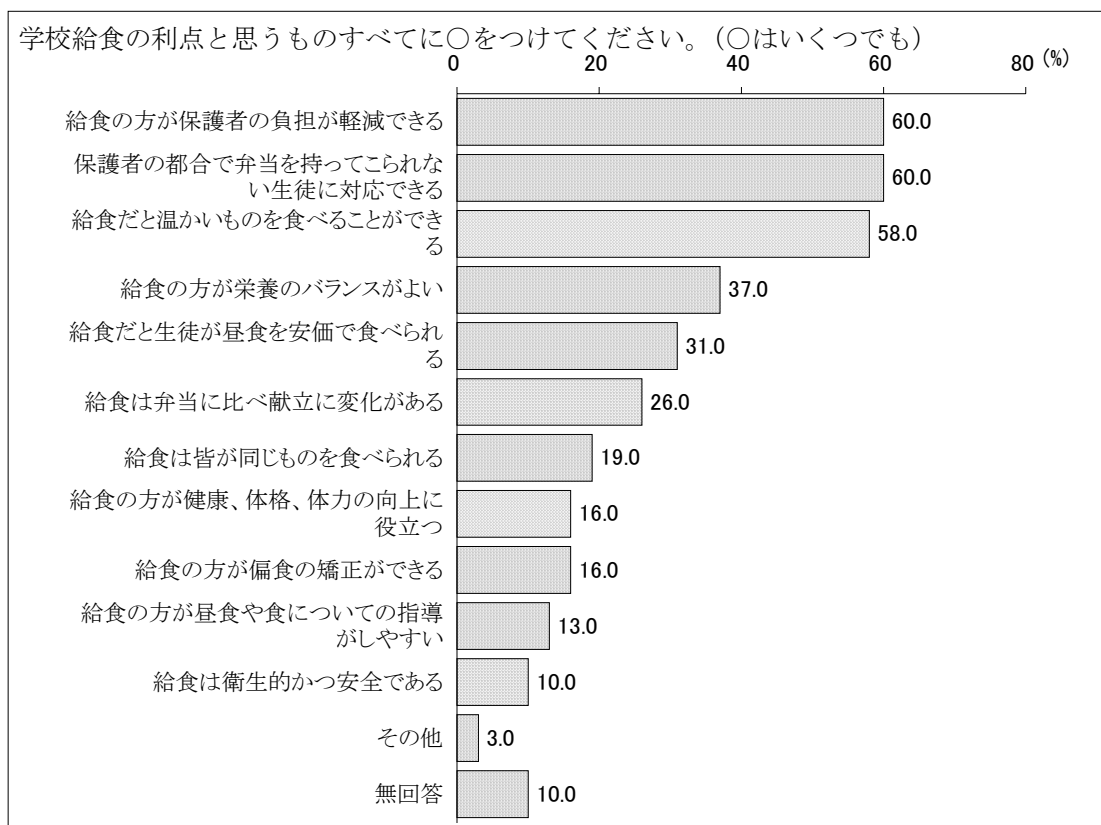
給食のよい点を選んでもらったところ、「家の人が楽になる」(70.6%)と「温かいものが食べられる」(69.8%)が7割前後と特に高く、次いで「栄養のバランスがよい」(55.6%)、「弁当は荷物になる」(53.0%)が半数以上となっている。

(3)-2 給食の利点(保護者)



学校給食の利点を聞いたところ、「給食だと温かいものを食べることができる」(83.0%)、「給食は弁当に比べ献立に変化がある」(76.1%)、「給食の方が栄養のバランスがよい」(73.2%)、「給食の方が保護者の負担が軽減できる」(66.3%)の4つが特に多くからあげられている。

(3)-3 学校給食の利点(教職員)



学校給食の利点に関しては、「給食の方が保護者の負担が軽減できる」(60.0%)、「保護者の都合で弁当を持ってこられない生徒に対応できる」(60.0%)、「給食だと温かいものを食べることができる」(58.0%)の3点が特に多くから選ばれている。